

日本生物物理学会若手奨励賞発足の背景について 生物物理 46(1) p46 (2006)より

生物物理若手奨励賞

—発足の背景—

早稲田大学理工学部物理学科 石渡信一

日本生物物理学会は創立以来、賞というものを設けてこなかった。賞を出さないことと、上下を意識しない自由な雰囲気とが表裏一体となって、生物物理学会のよさが形成されてきたともいえる。先達が築いてきたよき伝統は継承したい。ところが近年、研究活動を取り巻く環境が急速に変わりつつあり、研究者はさまざまな形と局面で“比較と競争”を意識し、学会としても“時代の流れ”を強く意識せざるを得なくなった。社会の中における研究活動の位置づけが大きく変わり、研究成果の社会的還元の必要性や各学問分野の存在意義も問われるようになった。それとともに、最先端の研究が求める高度な科学技術の開発に多大な費用を要することから、基礎科学分野に投じられる研究費は着実に増加している。その結果、特に先端技術を駆使する分野では、高額の研究資金を獲得できるか否かが、研究の量のみならず質をも左右する状況となっている。このような時代背景の中にあって、生物物理分野で活躍しようという若手研究者の将来に道をつけることは、学会としての責務の1つであると考え。対象も方法も多様な研究の成果を“評価する”ことは難しいが、その分野の多くの研究者が認める研究成果は、社会的にも過不足なく理解されて欲しいし、そのような成果をあげた若者は、この時代の波に乗って自由に研究できる環境を獲得し、その才能を十分に伸ばして欲しい。このような背景と考えのもとに私達は、2005年の第43回札幌年会から若手奨励賞を設けることを決意した。これを生物物理学会らしい賞にするためにはどのような選考方法がよいか、応募資格をどうするかなど、運営委員会の中で1年間にわたって議論をし、それをもとに規定を作成した。運営委員会では、この賞の創設について強い反対意見はなかったが、賞を設けることの影響などについて、当初は懸念する声があった。応募資格や選考方法など、まだまだ改善すべき点があると思われる。この若手奨励賞が、時代に即した価値ある賞として成長することを願っている。